

凹地の中にある大宅（追分か大内）という小さな美しい湖の傍を通り、それから雄大な市川峠（市野峠）をのぼった。すばらしい騎馬旅行であつた。―以下略―

まず、英国旅行家イザベラ・バードと幕末の地理学者古川古松軒との感慨の違いに驚かされる。「日本奥地紀行」は、田島の町並みの美しさ、南山の山並み、長野の渡しといった情景が見事に表現され、現在は大内ダムとなった大内沼の辺を廻り、下野街道を逸れて前記した越後国への近道と進んだことが伺える。

時期は遡るが明治五年（一八七二）、太政官布告により全国の宿駅は廃止され、代わって陸運会社、内国通運会社が設立され、各宿駅は揃って加入している。中付駕者も明治六年に中牛馬会社を設立し、明治十二年（一八七八）には会津一円の中牛馬会社が組織された。このことは旧態の宿駅と中付の構図となり抗争もあつたが、街道筋は一応の小康状態を保つのであつた。

しかし明治十五年（一八八二）一月に福島県令に任ぜられた三島通庸は、着任直後の二月二十八日、北会津、河沼、大沼、耶麻、南会津、東蒲原の六郡の郡長を会津に招集し、会津は物産が豊かであるが四方を山に囲まれ、農商工全般の事業の妨げとなつていゝる。このため栃木、新潟、山形へ通ずる新たな道路を開削するよう命じたのであつた。その内容は、会津地方六郡の独身・病身を除く十五才から六十才の全住民が、毎月一日二ヶ年の労役に服すべしという過酷なものであつた。

まず会津若松から下郷に至る道筋においては、大内峠越えの道は避けられ、元禄八年（一六九五）に開けられた大川沿いの松川新道が拡張されて利用されることになつた。榎原以南はほぼ原道を進むが、山王峠を越えて栃木県に入ると、その名の起こりともなつた川治を經由して再び下野街道に戻るというもので、ここでも

「太閤下ろし」と異名をとつた高原峠越えは避けられたのである。

明治十七年十月二七日、会津三方道路の開通式は盛大に行われた。新しい道路は、新政府の政策力を見せつけるかのように巾員も広く、管理も行き届いたもので、到底峠越えの細い道筋では対抗のできるものではなかつた。

戊辰の戦争も終わり新政府となつて、小康・立直りの芽生えてきた榎原村以北の倉谷や大内、関山、福永村々にとつて、このことは大打撃となつた。

新道ができてからの大内峠は、毎年五月になると自分たちの持ち馬を農耕用として貸し出す大内地区民の姿も見られたが、馬が機械に代わる昭和三十年代に入るとその姿も見られなくなり、次第に峠越えの道筋は人も入らない藪状態となつていった。